

る。勿論純粹の科學としての組織的知識を要する程のこともないが、幼兒の周圍にある動植物等について、一般的——併し確實なる知識は有して居なければならぬ。之れは特別に幼稚園教育者のみ限つた知識といふのではないけれども、必ず缺くべからざる準備知識の一つとして、必要なるものである。

七、幼稚園管理法。之れは一人々々の保姆として直に必要なことではないかも知れないが、幼稚園の設計、設備、乃至計理事務等に關し、たとへば園長としての事務を行ふ場合の爲めに、一通りは通じて置く必要のあるものである。

八、尙ほ以上の他に、幼兒衛生の知識及び種々の技術上の熟練を要することはいふまでもない。

## 英文學にあらはれたる子供 (十)

東京女子高等師範學校教授

岡 田 み つ

### 『デミ』と『デージー』

(米國の女作家オルコット(Alcott)女史の著 Little women 中の一節)

デミとデージーは双生兒<sup>ふたご</sup>で、デミは男の兒、デージーは女の兒です。二人とも四歲位になつて居ますが、飛んだ吾儘者になりさうな位に持て囃され切つて居ます。此子達は、生後八月で歩き初め満一年ですら、物が言へて、二歳の時には、チ

ヤンと食卓に着いて、人が賞めそやす程に行儀が宜いとして、親の目からは、素より、世にも珍らしい子なのです。

デージーは、三歳の時に針を<sup>すぶん</sup>と強請で、四針しか縫目のない袋を拵へた事もありますし、小さな

爐を使つて飯事をする様の巧者な方には、下女のハンナが感涙を催す程でした。デミは、祖父に字を教へて貰ひますが、其祖父の新案で、手と足とで、ABCの形を造るので、心と身體とが同時に運動をする事になつてゐます。

此子が早くから機械好きの傾向を見せたので、父親は大喜びですが、目に入る限りの機械の眞似をしては、子供部屋を散亂するので、母親は弱り切つて居ます。或時などは、椅子の後ろに笊をぶら下げて、其中ヘデージーを入れて、吊るし上げる工夫をするのですもの。所が何程骨を折つても、うまく行かないので、哀さうに、デージーは頭を彼方此方ヘ打付けられて居るのを（本人は兄思ひの愛らしい心で、不平も言はなかつたのですが）母親が見付けて、急いで制止しましたら、技師さん大不機嫌で「母さん。それ僕の昇降器なの。今デージーを引上げやうとしてゐるのに！」

二人の氣質は、全然相違つて居る割合には、仲

が良くて、喧嘩も日に三度以上は滅多に爲ませぬ。勿論兄が妹を虐めるのですが、外に向つては殊勝に妹を同護ひます。此デージーといふ子は、ボチャ／＼肥えて、色の美しい機械の宜い子で、人懐こくて誰にでも馴染みます。生得人に撫愛せられるやうに出来てゐる兒で、華やかに着飾らせて人中へ出せば、人が大騒ぎをするとき定まつて居ます。可愛らしい所作だらけの子で、天使でもあるかと思はせるやうですが、稀には人間らしい悪い事もするので、結局丁度よいのです。平常晴々した氣分で、毎朝寢衣の儘で窓へ攀ちよつては晴雨に係らず「い、御天氣／＼」と言ひます。誰とでも仲がよくなるので、この子に遇つては、氣六づかしい頑固の男子でも、降参して仕舞ひますから、況してや、子供好きと來たら嬉し涙に暮れるとでもいふ程です。いつぞやも、片手に匙を持ち片手にミルクの入物を持つた儘、腕を擴げて「私皆が大好き」と言つて、世界中を抱擁して、食べ

させてやりさうな態度をして見せました。

デミは、夜床へ入るのが大嫌ひで、いつかも、母親が子供達を早く寝かせて、父親とゆつくり夕食を食べやうと心構へをしてゐましたのに、左様の時に限つて、猶大困らせをさせるのでした。いくら母親がネンネ歌を唱つたり、搖つたり、御伽話をしたりして、智恵限りの工夫をしても、デミは大きな眼を明いてゐて、妹のデーちゃん丸くなつて疾の昔に、穩順しく眠つて終つてゐるのに、マヂと燈火を見詰めて居ました。やがて玄關の戸が明いて、父親が足音を忍ばせて食堂へ入る音がしましたので、

「母さんが一寸下へいつて、父さんに御飯を上げて来る間、坊は穩順しく眠していらつしやいな」と母が申しますと、

「坊も御飯」と、デミは直ぐ御馳走に加はりさうな氣勢をしました。

「イーエ、不可ません。デーちゃんのやうに、穩

順しく眠すれば、明朝のに御菓子を取つて置いて上げますよ。」

「ウン」と合點して、デミは早く寝て、朝にならうと眼をしつかりと塞いで終ひました。

此期を逸してはと、母親は大急ぎで下へいつて夫を迎へ、食事に取り掛りますと、食堂の戸の取手が妙にガタ／＼して、幼ない聲が

「此處明け／＼、坊入るの」と焦心さうに音なひました。

「アレあの腕白子僧が！獨りで眠れといつて置いたのなのに、まあ、下りて來たのですよ。風でも引かうと思つて」と母は出迎へながら、さう言ひました。

「もう朝」とデミはニコ／＼して、ぞろ／＼の長い寢衣姿で入つて來て、食卓の周圍を歩きながら欲しさうに御菓子に目を付けました。

「イーエ、まだ朝ではありません。ベッドへ御歸り。さう母さんを困らせるものではないの。御砂

糖の付いた御菓子を上げますからね。」

「坊は、父さんが好き。」と慧しくも、父親の膝に上つて御菓子に有り付かうとのデミの魂膽を、父親は首を振つて拒んで、さて母親に對つて、

「二階で一人で寝ろと言ひ付けたのなら、その通りさせなくては駄目だ、よい加減にして置くと、貴女の言ふ事なんぞ服従なくなるから。」

「エ、そうですとも、御出で坊や」と母は一位打つてやりたいやうな氣分で、デミを連れ去らうとして居るのに、デミの方では、部屋へ歸れば必然御褒美があると鑑定を付けて、上機嫌に跳りはねて居ました。成る程當にしてゐた通りで、目前の事よりは考へぬ母親は、角砂糖一つデミに遣つて、ベッドへ入れて、朝まで下りて來てはならぬと言ひ聞かせました。

「ウン」とデミは、満足氣に、砂糖を舐りながら計略圖に當つたものだと思つて居ました。

母は食堂へ戻つて、面白く話しながら御飯を食

べて居ますと、又デミが白衣姿でやつて來て、臆面もなく「もつと御砂糖母さん」と強請て、母親の非行を露顯させてしまひました。

「之は不可」と父親は嚴然となつて「此子にチャンとベッドへ行く癖を付けなくては、とても落付いて何も出來はしない。貴女があんまり言ふなり次第になつてゐるからです。一度懲らすといふんだ。ベッドへ入れて、獨り置いて御出でなさい。」

「でも、私が傍に居てやらないと、到底一人ではゐないのであるもの。」

「そんなら僕がしてやる。デミ！二階へいつて、母さんの仰る通りにベッドへいらつしやい。」

「いや」とデミは、狙つてゐた御菓子を取つて、平然として食べ始めました。

「父さんに、そんな事を言つてはなりません。一人で行かないと、父さんが抱いて連れて行くよ。」

「あつち行け。父さん嫌ひ！」と此度は、デミは母親の裳へからみついて來ましたが、母親までが

見放して「非道い事をなさるなよ」と言ひながら、自分を敵に引渡したので、今更のやうに仰天して終ひました。御菓子を取られてしまひ、遊びは禁止せられ、力の強い手に抱かれて、厭だといふベツドへ連れて行かれるのですもの、口惜しくて堪らず。二階へ行く途中も、蹴るやら叫喚やらして荒れ廻りました。而して、父親が、右側からベツドへ入れると、左側へ轉び落ちて、戸口を目掛けて走り出す。すると、また不面目にも、捕へられて、ベツドへ入れられるといふ活劇を、繰り返しく演じた揚句、デミは疲れて力が無くなつて、聲限りにたい泣き立てました。泣いて嚇すと、母親は降参して終ふのですが、父親は柱かなんどのやうに、一向無感覺で、慰藉てもくれず、御菓子も、子守歌も、御伽話も、何も無しで燈火まで消してしまひましたので、デミは案に相違して、尙の事厭になつて來ました。而して、口惜しさの念が靜まると共に、母の慈愛が戀しくなつて、「母さ

んく」と物哀れに呼んだものですから、それを聞き付けた母は、不惑さに堪へず、走り上つて來て、

「私傍に居てやりませう。もう穩順しくするでせうから」

「それはいかん。あなたが言ひ付けた通りに獨りで眠れと僕は言つてゐるので、今夜一夜かゝつたつて、其通りにさせなくては。」

「あんまり泣かせて病氣にでもなると」と、母親は我子を振り捨てた事を、自ら責めてゐました。

「いや大丈夫。もう疲れ切つて居るから、直に寢てしまふよ。そうすればそれで御仕舞ひさ。言ふ事は服従ものだといふ事が、この子にも了解たうし。まあ手出しを爲ないで、僕が宜いやうにするから、任せておきなさい」と、強くきつぱり夫が言ひましたので、妻は黙つて服従しました。デミは、ベツドの底の方へ潜り込んで、ちつとして居ましたから、

「可愛さうに、眠いのと泣いたので、もう弱つたろう。よく夜着を掛けてやりませう」と父親は愛兒の側へ寄りましたら、デミはその拍子に目を明けて、泣き吃逆ながら腕を伸して、「もう穩順しくするの」と言ひました。

母親は、階子段に坐つて、子供部室の森としてゐるのを不審に思つて、種々の事變を想像した揚句に、一層行つて見て、安心しやうと室内を瞰きましたら、デミは平常の大的字形でなく、小さく丸くなつて、父親の腕に抱へられて、父の指を一本握つて、スヤ／＼眠つてゐました。父親も、亦兒の力が弛んで指を放す迄と、女程の辛抱をして待つ間に、愛兒との奮闘の疲れで、いつの間にか寢込んでしまつて居ました。

デミは、亦理屈張る性癖があるのを、祖父が愛して、よく此子と哲學問答をしますが、時には先生の方が、遣り込められて、傍の女達の笑を買ふ事もあります。ある晩、就寝前の一運動が濟みま

したら、

「御祖父ちゃん、如何して足が動くの」と、デミはつく／＼自分の足を眺めて尋ねました。

「坊の心意が動かすの」と老儒は、デミの柔い黄髪を撫でながら、眞面目に答へました。

「心意ッて何」

「心意ッて御前の身體を動かすもの。いつか御祖父さんが時計を明けて見せて上げた時、登條で中の車が廻つて居たらう。あゝいふやうなもの。」

「坊を明けて下さい。見たいから。」

「それは御祖父さんには出来ない。坊だつて時計を明けられないだらう。神様がキー／＼と巻いて下さるのだから。神様が巻いて下さる間は、坊が動いてゐるの。」

「さう」とデミは、珍らしい事を聞いたので、目を見張つて、「坊も時計見たやうに誰かい巻くの。」  
「さうだよ。だが見せる譯には行かない。見て居ない時に巻かれるのだから。」

デミは、自分の背中が時計の内部のやうかと思つて、觸りながら、眞面目に、

「坊が眠睡してゐる時に、神様が卷くのだ。」と申しましたので、祖父はよく會得出来るやうに、懇々と説明して聞かせますのを、デミは身に染みて聞いて居ましたが、傍に居た祖母が案じて、

「赤ン坊にそんな事を話して宜いのですか。目の上に腫瘤を拵へて、難しい事ばかり訊きたがつて困るのですよ。」

「難しい事を尋ねる程だから、答へてやれば解るのだ。此方から考を注ぎ込むのではないが、心にある事を開發してやるのさ。今時の子は賢いから此子は私の言ふ事が皆解るに違ひない。坊の心意はどこにあるのだへ？」といつて御覽。」

デミは片足で立つて、一寸鶴の格好でゐましたが、澄し切つて「御腹にあるの」と言ひましたので祖父も、祖母も出笑して、それで哲學の御稽古が果てました。

母親は、いろ／＼の規則を拵へて、子供達にそれを守らせやうとするのですが、子供は遁辭が上手ですし、平氣で横着をしますし、可愛いらしく大人を詭すのですもの、何で母親がそれに敵ひませう。葡萄入菓子を作る日などは、デミは忘れず臺所へやつて來て、手傳をしやうといひますから、

「もう、干葡萄を食べてはいけませんよ。病氣になるといけないからね」と母が申ますと、

「坊は病氣になりたいの。」

「坊がなると、母さんが困るから、彼方へいつてデージーと一所に、御菓子を拵へて遊んでいらっしやい。」デミは澁々立ち去りますが、怨みは心に残つてゐるので、好い機會があると、巧みに其を持出して、母親を閉口させます。御菓子も出來上つて、安心した母が二階へ來て、

「さあ二人とも穩順しかつたから、母さんが何でも御相手をして上げませう」と申ますと、

「眞實<sup>ほんと</sup>？ 母さん」とデミは心に名案があるので、念を押します。

「エ、眞實<sup>ほんと</sup>！ 何でも御前のしたい事」と、先の見えぬ母は同じ歌を幾度も唱はせられるか、御菓子でも買ひにゆく位の事と、高を括つて申ますとデミは。

「では下へ行つて、干葡萄を皆食べてしまひませう、母さん」と遣り込めます。

## ○佛蘭西國幼稚園の進歩

一九一〇年十二月以來、巴里セウイーニエ中學校に於てフレイベル講習會開催せられつゝあり。これフレイベル組合の催にして、幼稚園保姆、幼稚園女教師等のために開かれたるなり。

幼稚園保姆に向ては準備實習として理論的並に實用的の實習を課す。是れ佛國風に設けられたるフレイベル式なるなり。其課目左の如し。

### 教育學

フレイベル式——フレイベル式が佛國に及ぼしたる影響——フオン、マーレンホルツ夫人——ミシユル

### 衛生學

フレイベル式の英國、米國、獨逸國に於ける傳播

### 動物學

兒童の衛生

### 植物學

主要動物に就いての談話  
果實及び主要植物に就いての談話、類纂に散步す

唯一神學 企畫篇を完結す(秋は收穫、冬は家、市街、交通等。

春は水、風、河、夏は野外の太陽)

地理學 地理學總論

技工練習 フレイベルの作業、玩具の製作

音樂 翼琴——唱歌(聽取練習——童謡作歌練習)

繪畫 彩色、模型製作——木版描畫——御伽噺説明畫——寫生——模型製造(果實)

實地練習 (イ)普通幼稚園に於て (ロ)セウイーニエ幼稚園に

於て上記實習は一週三回午後之れを行ひ、實地練習は午前並に放課後の午後に行ふ、授業料は一ヶ年凡そ八十圓(二百フラン)實習は二年間に亙る。第一年修了後には修業證書、第二年修了後には幼稚園教師たるを得る證書を交付す。

試験は毎年度の終に於て行ひ、筆答試験には教育學、地理學、動物學、植物學あり。口答試験、實地試験、音樂技工、實地練習等の課目に就いて行ふ。

佛蘭西幼稚園保姆等は獨逸諸嬢の例に倣らひ佛蘭西フレイベル會を組織したり。此會の目的はフレイベル式を習得し之れを家庭に實用せんとするにあり。且つ母及び幼妹に幼稚園趣味を獲せしめ、又三乃至六歳の小兒の發育に一層親しく従事せんとするにあり。本會の發起人は前フェヌロン中學校女教師ファンタ嬢なり。幾は本會の事業に就きて述べて曰はく、三歳乃至六歳兒童の教育に關するすべての研究、中學校の兒童級を變じて幼稚園部となすこと、少女をして幼稚園にて勞作せしむること等により。名譽會頭は巴里大學助教授ルイリアー氏、會頭はセウル女教師養成所教師ファンタ嬢なり。(兒童研究第十七卷第三號)